

Locus of control再考

——その問題及びセルフコントロールとの関係——

文教大学人間科学部 神田信彦

Reconsideration of locus of control: The problems and relationship with the self-control

Nobuhiko Kanda (Faculty of Human Science, Bunkyo University)

Key words : locus of control, general expectancy, self-control

はじめに

私たちがある成果を得ることを望んでいても、私たちは行動を起こすこともあれば、起こさないこともある。また、同じ成果を得るための行動は一つだけとは限らずどの行動が選択されるかは、たとえ同じ状況であっても個々の人によって異なる可能性もある。

他の条件が等しいならば、自分が行動すればその結果を得られると考えている場合と自分の行動ではその結果を得られないと考えている場合とを比較すれば、自分の行動によって結果を得られると考えている場合の方がそのための行動が起こる可能性は高いであろう。また、いくつかの選択肢があるような状況では、望む結果を得られる可能性の最も高い行動が選択されるであろう。

このような時に自分が望んだ結果を生み出すことができるという期待、さらには自分が自分を取り巻く環境に効果的に関わることができるという期待は、通常、コントロール感 (feeling in control), パーソナル・コントロール (personal control) あるいは統制感 (perceived control) と呼ばれることが多い。

コントロール感がわれわれ人間の行動の理解や予測に有効な概念であるという指摘は従来からた

びたびなされている (例えばPhares, 1966; Rotter, 1966; Skinner, 1996)。ところがコントロール感はいくつかの研究者がそれぞれ独自に使用しており必ずしも一貫した定義で用いられてはいない。同じ語をやや異なって定義したり、異なる語に対し同じ定義が与えられているのである。Skinner (1996) はそれまでに提唱されたコントロール及び関連する概念の定義の一覧表を作成している。これによればその数は117にも及んでいる。

コントロール感が行動の生起に影響するという考え方やこれに類する考え方はさまざまな研究者によって提案されてきた。代表的なものを挙げてみると、White (1959) の“コンピテンス (competence)”, Rotter (1966) のローカス・オブ・コントロール (locus of control), Langer (1975) の“イリュージョンオブ・コントロール (illusion of control)”, Seligman (1975) の“学習性無力感 (learned helplessness)”, Bandura (1988) の“セルフエフィカシー (self-efficacy)”がある。中でもローカス・オブ・コントロール概念は、コントロール感を用いて私たち人間の行動を理解しようとした先駆けである。

これらとは異なり自分自身を制御することを扱う意味でコントロールに注目する概念としてセルフコントロール (self-control) があり、これも私

たちのさまざまな行動に関わりがあるとされている。

本稿の目的は、人格変数としてのコントロール感であるlocus of control（以下では、LOC）の基本的考え方を紹介し検討するとともに、LOCとセルフコントロールとの関係について検討することである。

状況変数としてのコントロール

コントロール感に関する研究は、これを状況変数として扱うもの（例えば、Langer, 1975）、人格変数として扱うもの（Rotter, 1966）、あるいは両者を交えて扱うものまで多岐にわたる。しかし、重要なことは、いずれも客観的なコントロールではなく、主観的なコントロール、あるいは期待としてのコントロールを取り上げていることである。

状況変数としてのコントロールは、その人がおかれた状況で与えられた課題や環境刺激をコントロールできるかどうかへの期待を操作することによるものである。言い換えれば、課題解決が行えるかどうかや、課題の遂行に有害な影響を持つ刺激（例えば騒音）をその人自身の反応や行動によって取り除くことができるかどうかに関する期待を操作することによって検討され、一般に実験室研究で用いられてきた。例えばPhares（1957）は同一の課題場面で一方の実験参加者にはその課題がスキル課題であると伝え、もう一方の実験参加者にはその課題がチャンス課題であると伝えた。その結果、スキル課題であると信じた実験参加者のほとんどは試行に成功した後、次の試行での成功への期待を高めた。Pharesはこれを“自分が取り組む課題をスキル課題として分類することは、その人にその後の課題についての期待を形成するにあたりそれ以前に行った結果を利用させる”と結論づけている。

では人格変数としてのコントロール感であるLOCとはどのようなものであろうか。

人格変数としてのLOC

Locus of control

LOCは自分の行動と強化との間の随伴関係に対する期待である（Rotter, 1966）。言い換えるなら、ある成果を自分自身の行動で生み出すことができるかあるいは運や他の力のある人など自分以外の存在によって生み出されるかに関する一般的期待あるいは信念であるとされる。

LOCはRotter（1954）の社会的学習理論にその起源があり、その行動が生起する可能性を予測するモデルの変数の1つであった。その後、Rotter（1966）がLOC概念のユニークさと有用さを指摘したり、Phares（1966）によるLOC研究のレビューによって多くの研究者の注目を引く概念となった。

Locus of controlはそのまま“ローカス・オブ・コントロール”と呼ばれることが多い。強いて日本語にすれば“統制の所在性”（水口, 1975）を挙げることができる。Rotter（1966, 1975）は論文タイトルとして“locus of control”ではなく“internal versus external control of reinforcement”を用いその本文においても“locus of control”あまり用いていない。LOCについてRotter（1966）は以下のように説明している。

“強化を自分の行動に完全には伴わないとその人が感じる時、われわれの文化では、一般的にそれは運、運命、偶然の結果として、力のある他の人のコントロールのもとにあるものとして考えるか、あるいは自分を取り巻く力は非常に複雑で予測不可能なものとして考えられる。出来事がこのように解釈される場合、筆者たちはこれを外的統制（external control）の信念と呼ぶ。自分自身の行動や比較的永続する自分自身の特性に出来事が伴うとその人が感じる場合、筆者たちはこれを内的統制（internal control）の信念と名付ける”（Rotter, 1966）

LOCはこのように内的統制と外的統制に分けられるが、RotterによればLOCは内的統制と外的統

制とを両極とする一次元連続体であるとされ個々の人のLOCはこの連続体のいずれかに位置することとなる。Rotter (1966) はこれに基づくLOC尺度を作成した。これは内的統制か外的統制かを表現した項目を回答者に対提示し、どちらが自分の考えに該当するかを選ばせる強制選択形式の23対の項目群で構成されている。人々のLOCの分布は曲線的であり、その両極に位置する人々は中間的な位置に分布する人々よりも不適応であるとされる。

Crandall & Crandall (1983) はLOCに関する研究をレビューして、内的統制の人は外的統制の人に比較し、学業や職業についてよりよい成果をあげ、持続性にすぐれ、高い自尊心を持ち、対人関係に満足し、不適応感を抱きにくいことや、目標の実現にかかわる情報を積極的に探索をより多く行うなどの特徴を挙げている¹。

またLOCは強化の生起に関するそれぞれの人のさまざまな先行経験によって形成される比較的安定的なものとされる。つまり比較的安定した人格特性と考えられる。ではLOCはどのように形成されるのであろうか。強化についての一般期待であるLOCは、その人のそれまでの強化経験の関数として形成されるとされる。強化を得る、つまり成功経験を積み重ねて来た人は内的統制への期待が形成されるであろう。一方、自分の行動が成果と結びついておらず誰かの力や偶然や運にかかっていると考える経験や失敗を繰り返し経験してきた人は外的統制への期待が形成されるとされる。

Rotter (1954, 1966) の示唆に基づいて、Carton, Nowicki, & Balster (1994) は子どもに随伴的に関わり、自律性を奨励する親は、子どもの内的統制への期待を促すが、反対に子どもに随伴的ではなく関わり、専制的に関わる親は、子どもの外的統制の期待を助長するであろうと考え、養育態度とLOCとの関係を扱った70ほどの研究をレビューし、上記を支持する結論を得ている。

¹ 1970年代までのLOC研究のレビューを行った日本語論文として水口 (1975)、樋口・鎌原・清水 (1981) がある。

次に社会的学習理論におけるLOCの位置づけを見ることにしよう。

LOCとの社会的学習理論

Rotter (1954) はその社会的学習理論の中で私たちの社会的行動を予測する公式を提案した。社会的学習理論は、人間の社会的行動を予測するために学習理論と認知理論との統合を試みようとしたものである。

社会的学習理論は行動を期待、強化及び心理的状況という3つの変数によって理解し予測しようとするものである。

つまり“ある特定の心理的状況で、ある行動が生じる可能性は、行動が特定の強化をもたらすであろうという期待と、その状況におけるその強化の価値との関数”として考えようとするものである。

ここではLOCが含まれる期待について取り上げる。Rotterによれば、期待とは“特定の状況（あるいは諸状況）で特定の行動の関数として特定の強化が生じるとその人が抱いている可能性である” (Rotter, 1954)。Rotterはこの期待を行動予測に盛り込み、ある欲求の満足をもたらす行動が生じる可能性 (need potential: NP) は、その行動が強化をもたらすであろうという期待 (freedom of behavior: FM) と、その強化の強度や価値 (need value: NV) との関数であると表現した。

つまり、

$$(NP=f(FM \& NV))$$

である。さらに行動予測に期待を盛り込むにあたって、社会的学習理論では以下の仮説に基づいて期待を考えている。私たちは“2つの状況を類似したものと判断すると、強化に関する期待が一方からもう一方へ般化する”というものである。これは2つの類似する状況における期待が全く同じになるということではなく、一方の状況の期待がもう一方の状況に置ける期待に何らかの影響を与えるというものである。

それぞれの状況での期待はその状況に関する特定期待だけで決まるのではなく、その人が類似し

ていると感じた他の状況における期待（さまざまな範囲の一般期待）の影響を受け決まってくる。Rotter（1954）はこれを以下のように表現した。

$$Es^1 = f(E's^1 \& GE / Ns^1)$$

s^1 → 特定の状況

N → その状況（ s^1 ）での個人の経験の総量

E → 期待

E' → 特定期待

GE → 一般期待

ある人のある特定状況における期待（ Es^1 ）は、その特定状況についての特定期待（ E' ）と、一般期待（ GE ）をその人がその特定状況を経験した総量（ Ns^1 ）で割った値の関数である。

これによれば、その特定の状況での期待への貢献度は、その特定の状況を多く経験しているほど特定期待（ $E's^1$ ）が高く、一方、特定の状況を経験していないほど一般期待が高くなると考えられる。したがってこれまで経験したことのない場面や、同一であるとか非常に類似しているという判断がつかないような曖昧な状況では、一般期待は行動が生起する可能性に強い予測力を持つと考えられるのである。

特定期待と一般期待の構造について、Rotterの考え方を基にまとめてみると、特定期待と一般期待とは階層的で後者が前者を包含する構造となっていると考えられる。真に特定の期待は、刺激布置や強化の種類や強度が全く同じであると人が考える状況であろう。刺激布置や強化の種類やその強度の一致度が低くなるに従って特定の期待である度合いが低下してくる。それらはそれぞれの人によって主観的に上位の特定期待（あるいは最下層の一般期待）として1つのクラスにまとめられる。それはいくつもの水準のクラスとなり最終的には最上層の一般期待を形成するのである。各水準には複数の特定期待（一般期待）が類似の程度により上位の階層の特定期待（一般期待）に包含される。

自分の行動に強化が伴うことに対する最上位の一般期待がLOCということになる。こうして形成されるLOCは比較的安定した人格特性と考えられる。Rotterによれば、限られたデータによって広範な事に対する予測が可能となるとされる。それは統計的に有意なものであるのだが予測力はさほど高くなく、特定期待の予測力がずっと高いということである。例えば、ある人が体重減少など健康のためにジョギングをするかどうかや、英語の試験勉強をするかどうかについては、その人自身の健康行動と強化である体重減少との関係に関する特定期待や、試験勉強と強化である成績に関する特定期待がわかるとすれば、それぞれの行動が行われるかどうかについての予測力はLOCよりそれぞれの特定期待の方が高いのである。

LOC研究における問題

Rotter（1975）はLOC研究が多くの研究者によって進められる中でいくつも考慮すべき問題を指摘しているが、ここでは強化価値と、内的統制と外的統制の関係に関する問題を取りあげる。

①強化価値 Rotter（1975）は、それまで行われた多くのLOC研究の問題点の一つとして強化価値が十分考慮されずに研究が進められている点を指摘している。これはRotter（1966）によってLOC概念の興味深さや有効性が指摘されて以来、その社会的学習理論に基づく行動予測に関わる変数の中でLOCが一人歩きしてしまったためであろうか。

Rotterが指摘したのは、人の何らかの行動（特に社会的行動）を予測するにあたってはLOCとともに強化価値を明確にすることによってその予測力は高まるということである。それをおこなうためには強化価値をコントロールするか、あるいは強化価値を測定する必要がある。例えば、試験勉強をすることによって実際の試験でよい成績を取ることがその人にとってどの程度重要であるかということが明確になる必要がある。

一般的に学業や適応に関する行動であれば、それぞれの人が強化価値をほぼ同じ程度に持っているという暗黙の前提で研究が進められているとも

考えられ、近年の研究（例えばForgas, Wolchik, Braver, Freedom, & Bay, 1992; 神田, 1993, 2000）でも同様の考え方に基づいていると考えられる。少ない変数で行動予測を行うことは理想であると言えようが、今日の心理学諸領域で行われている多変量解析を用いた研究からも明らかなように、単一の変数によって私たちの行動を予測することはしばしば困難である。適切な実証的及び理論的検討に基づき行動予測の精度を高めることは重要である。したがって強化価値の問題は重要な指摘である。

②内的統制が好ましく外的統制が望ましくないという考え方に存在する問題　すでに述べたように内的統制は外的統制より“よい”という結果が多くあるが、Rotterは、多くの研究において暗黙のうちに内的統制の人が好ましく、外的統制の人が好ましくないことを前提にしていることに注意を喚起している。例えば内的統制と適応の問題を取り上げ、適応は価値概念であり、その定義の仕方によってその関係は変わってしまうこと、LOCの内的統制の程度と現実のコントロールの程度が著しく食い違う場合、その食い違いに気づく経験をしたとき強い心的外傷を被る可能性を指摘している。

従来の研究結果を見れば、一般的には内的統制が好ましい傾向と関連し、外的統制が好ましくない傾向と関連するとするのは誤りではないと思われるが、その一方で過剰な内的統制の傾向は否定的側面と結びつくことがあるという指摘であり、先に述べたようにRotterはLOCの分布は曲線的でありその両極は不適応的であるとする考え方に符合するものである。

LOCは私たちの行動を理解する上で有効な概念とされ今日に至っているが、上述の点も含め十分に検討されていない問題がある。その中の一つに他の概念と関係や位置づけがある。そこで次にLOCとセルフコントロールとの関係について検討を行う。

LOCとセルフコントロール

セルフコントロール

セルフコントロールは自分で自身の心身の諸側面を自覚的・意図的に調整することである。諸側面としてBaumeister, Heatherton, & Tice (1994) は感情、思考、衝動、遂行を主なものとして挙げている。自覚的・意図的であることは注意を働かせ調整にとって不都合な感情、思考、衝動や遂行を抑制することである。

適切なセルフコントロールを行えることは、その人の心身の健康や適応にとって重要な意味を持っている。例えば、セルフコントロールがうまく機能することは、高い学業成績に結びつくこと（Feldman, Martinez-Pons, & Shaham, 1995; Tangney, Baumeister, & Boone, 2004; Wolfe & Johnson, 1995）、心理的適応と関係のあること（Tangney, Baumeister, & Boone, 2004）が明らかにされている。また、4歳時の満足の遅延、つまり自分の欲求や願望の充足をセルフコントロールする能力は早期成人期の良好な対人関係の予測因子となることが示されている（Mischel, Shoda, & Peake, 1988; Shoda, Mischel, & Peake, 1990）。つまりセルフコントロールは生活のさまざまな領域での成功を促進する適応能力であるとも言える。

Carver & Scheier (1981, 1982) はコントロール理論を提案している。これは主に行動に関するセルフコントロールの理論である。その基本メカニズムはMiller, Galanter, & Pribram (1960) のTOTEフィードバックループの考え方を取り入れてたものである。TOTEは照合 (Test) - 操作 (Operate) - 照合 (Test) - 終結 (Exit) の連鎖である。目標や基準と現状を比較し不一致を検証し、それに修正を加える操作を行い、さらに目標と現状の比較を行うことを繰り返し、不一致がなくなればこの過程は終結する。これはネガティブフィードバックループであり、Carver & Scheierはセルフコントロールへの適用を以下のように説明している。感知した現在の値と基準値からのズレを減少させる働きを持つもので、まず、“入力機能

(input function)”によって現在の状態を感知し，“比較器 (comparator)”によって基準値と比較される。両者の間に不一致があれば，“出力機能 (output)”によって不一致を低減するための行動が生ずる。これにより環境に影響を与えることとなり、さらに現在の状態に変化が生じ異なる情報が得られ、基準値との新たな比較が行われる。一般的にはズレが最小になるまでフィードバックループは作用するというものである。つまり、セルフコントロールは、自己と外界との間の適合を作り出すために自己の諸側面を何らかの基準や目標に一致させるための過程である。

これは基本的なメカニズムであるが、CarverらはPowers (1973a,b) のモデルをもとに、フィードバックループは相互に結びついた階層構造をなすとしている。簡単にそれを説明すれば、上位目標を持つ上位コントロール (principal control) と下位目標を持つプログラムコントロール (program control) からなる。プログラムコントロールの目標達成は上位コントロールの目標達成に寄与する。プログラムコントロールは具体的な実行行動であるが、さらに階層を形成し統合された行動から最下層の筋運動のコントロールまで複数の階層から構成されている。上位コントロールは自己概念に関わり、例えば“誠実な人間”というイメージを維持するためあるいは実現するための“約束した仕事を期限までにやり遂げる”というような具体的な行動である。プログラムコントロールはこれに伴う種々の行動でありそれらが階層構造を持ち、フィードバックループを構成するのである。

しかし、セルフコントロールは、プログラムコントロールの水準だけで行われる場合もしばしばであり、どの水準のコントロールが機能的に支配するかを決めるものは最上位のプログラムコントロールであるとされる。ここまで述べてきたことで明らかなように、セルフコントロールはそれ自体が目標ではなく、目標を実現するための手段としてとらえることができる。

また、セルフコントロールはきわめて短期的あ

るいは1回性のもから長期にわたるものあるいは短期的なものの積み重ねとしての長期的セルフコントロールがある (Carver & Scheier, 1982) とされる。例えば、野球の投手が周囲からの余計な刺激に惑わされずに1球1球の投球を行うことは、1回性のセルフコントロールであり、1つの試合を通じてペースをうまく配分して投げきることは短期的、さらにはシーズンを通じて自らの心身をよい状態であり続けるように管理するといったことは長期的なセルフコントロールの1つの例として挙げることができよう。

Carverらの理論を中心に述べてきたが、先にも述べたようにセルフコントロールは実行行動だけが対象ではなく、目標の実現の妨げとなる思考、感情、衝動や行動の生起を抑制することである。例えば、体重減少のために甘いものを食べるのを控えている人が、チョコレートを食べたいという欲求を抑制することや、その過程で“少しくらいなら食べてもカロリーはたいしたことはないから大丈夫だ”という考えを否定していくことを考えてみよう。自分の体重を減少させるために食行動を一定期間あるいは永続的に維持することはセルフコントロールである。さらにその時々を生じる欲求や思考を意識的に払いのけることもセルフコントロールであろう。

感情、欲求や思考のセルフコントロールと行動のセルフコントロールとはどのような関係にあるのであろうか。またそれらのセルフコントロールにネガティブフィードバックループを適用することはできるのであろうか。

行動のセルフコントロールは基準となる値と現在の状態を比較し不一致の場合に、行動自体を調整していくのであるが、体重減少の例で見たように、その行動の不一致の原因であったり、これからその原因になるかもしれない不適切な欲求、思考 (あるいは感情) があるとすれば、適切な行動を行うためにはこれらの排除や調整も必要である。つまり、感情、欲求及び思考に関するセルフコントロールは行動のセルフコントロールに付随して生じる不可欠なものであろう。さらに感情と欲求

のセルフコントロールは行動を伴わない思考活動においても同様の位置づけとなると考えられる。

次にLOCとセルフコントロールの関係を検討しよう。

LOCとセルフコントロールとの関連

同じように“コントロール”という用語で表現されるが、これまで見てきたようにそれぞれかなり異なる概念である。簡単に整理すれば、LOCは比較的安定した人格特性としての一般期待あるいは信念であり、それは自分の行動と強化の間の随伴関係についての期待である。一方、セルフコントロールは自分で自身の諸側面をコントロールすることであり、自身に属するものは思考（認知）、感情、衝動と行動である。セルフコントロールは手段、過程、能力である。手段であるとは何らかの目標を実現するためにセルフコントロールを行うということであり、過程とは目標達成に向けて思考、感情、欲求、行動をTOTEの枠組みによって制御することを意味しており、これは能動的、意志的、自律的な過程である。さらに能力であるとはセルフコントロールの個人差に注目してとらえる場合に考慮されるであろう。

両者の関係を考えるにあたり、これまでどのような議論が両者について行われてきたかをみると、Phares (1976) は“環境をコントロールすることができるという内的統制の人の感覚はその人自身をコントロールできるという感覚と関連するであろう。”と述べ、禁煙行動の継続と避妊を行うこととLOCとの関係を扱った研究を上げている。例外はあるもののそれぞれがうまくいくことと内的統制とが関連することを述べている。さらにPharesは子どもを対象にした満足の遅延とLOCの関係を扱った研究 (Walls & Smith, 1970; Walls & Miller, 1970; Mischel, Zeiss, & Zeiss, 1974 他) を紹介している。ここでは満足の遅延とLOCとの関係は一貫せず曖昧な結論となっている。しかしその後、Ferren & Krantz (1987) は内的統制が衝動のコントロールや満足の遅延、さらには教室場面での注意の制御と関係のあるという結果を報告している。

Carver & Scheier (1998) はセルフコントロールと他の理論との比較を論じる中でコントロール感（パーソナルコントロール）を取り上げているが、残念ながらセルフコントロールとの関係については述べていない。

Sinha, Nayyar, & Sinha (2002) はインドの高齢者を対象にソーシャルサポートとセルフコントロールが、人生への態度を肯定的にすることと統制感を高めることを明らかにした。ただしこの研究で用いられた統制感とは自分の住まいに対するものであり、ここまで述べてきたLOCではなく、それより水準の低い一般期待である。Sinha et al. (2002) はこの関係の解釈として、セルフコントロールの重大な効果として、高セルフコントロールの人は自分が経験するストレスを肯定的に受け止める傾向があることと、さらに統制不可能な出来事に直面した場合、認知をセルフコントロールすることによって、より高い統制感を得ることができるのではないかと説明している。ここでは統制感やLOCは従属変数として考慮されている。

Sinha et al. (2002) の解釈を検討するために役立つと考えられる過去のLOC研究を見ると、例えばPhares, Ritchie, & Davis (1968) はタキストスコープで提示される自分に関連する不快な刺激の知覚閾が内的統制の人は外的統制の人に比べ高いことを示し、またLipp, James, & Randall (1968) はフィードバックされた性格特性の否定的な側面の想起の成績が外的統制よりも内的統制の方が悪いという結果を得ている。これらは内的統制の人が失敗や不快な経験を抑圧してしまう可能性を示している。しかし、これらの実験デザインからは意識的または自覚的になされた結論することはできない。Sinha et al. (2002) の説明もその点では疑問である。

このようにLOCとセルフコントロールの間の概念的関係を検討した研究は少ない。しかし、Shell & Husman (2008) は“個人的信念は自己制御や達成関連行動を行うことを動機づけ、さらにそれを維持する動機づけに影響するメカニズムである。”と述べ、LOCや期待としてのコントロール感が自

己制御を行うにあたり促進的な役割を果たす可能性を指摘している。この可能性について以下で検討しよう。

Carver & Scheier (1982) は不一致低減の過程と区別し、期待—評価過程 (expectancy-assessment process) について述べている。これは不一致を減少させることができるか、あるいはできているかについての期待である。自分の行動やそれに関わる自分に属する資源の特性に関わる制約について考慮を行い、不一致低減が可能か否かが判断される。低減が不可能であると判断されると、セルフコントロールは中止されるかあるいは目標が変更される。Carverらが述べたように期待—評価過程がセルフコントロールとは分離・区別されるとすれば、期待—評価過程はセルフコントロールとこれに関わる内的／外的条件を監視 (モニター) し可否を判断するものであると言えよう。

LOCは“自分の行動と強化の間の随伴性についての期待”であった。別の言い方をすれば、“強化を得る (目標を達成する) ために必要な行動を効果的に行うことができると考える程度”と表現できよう。その背後には当該状況を分析し、必要な情報を収集し、自分のどのような行動レパートリーを使えばよいか判断する過程があると仮定しなければならないが、そうであれば、目標達成のためにセルフコントロールが必要である場合にはそれを行うということも含まれよう。したがってLOCが期待—評価過程に影響を与え、セルフコントロールの実行に反映することが予測される。しかしこれはRotterが指摘するように新奇な事態や曖昧な状況においてセルフコントロールが必要とされる場合に特に予測力は高まるはずである。

先にPhares (1976) が内的統制とセルフコントロールが関連する事を示唆したことを述べた。これには外的統制の人はセルフコントロールを行わないか、うまく行えないということが含まれていると言えよう。例えば、セルフコントロールが失敗した場合、期待—評価過程が作動しセルフコントロールを続行するか、目標を変えるかどうかを判断するとされるが、ここでもLOCは一定の働き

を持つ可能性がある。内的統制の人のLOCは、セルフコントロールを修正したり、別の有効なセルフコントロールを行うようにその人を方向づけ、一方外的統制の人LOCはセルフコントロールを中止するように方向づける可能性が高いと考えられる。

しかし、両者はそれほど単純な関係なのであろうか。例えば、仕事であるプロジェクトを担当するような場合、最終的な決定権を上司がもっているとす。自分の案を上司に否定された時、外的統制の人は上司つまり“力のある他者”が結果を左右する力を持っているということで、それ以上自分の案を主張することは行わない可能性が高いであろう。しかしこの時セルフコントロールは行われる可能性がある。上司に悪い印象を持たれないようにするために、せっかくのアイデアを否定されたことによって経験されるであろう不快感あるいは挫折感を表情や動作に表さないようにすることが考えられる。では内的統制の人の場合はどのような行動が期待されるであろうか。内的統制の人は自分の行動が強化 (成果) をもたらすという期待が強いのであるから、自分の案を上司に否定されても、諦めることなく上司に反駁を試みたり、あるいは時をあらため修正案を再提案する可能性もある。その場では内的統制の人も不快感の表出をセルフコントロールしたり、適確な反駁を行い上司を説得するために冷静になるように興奮を抑えるセルフコントロールを行うかもしれない。

つまり、内的統制の人でも外的統制の人でもセルフコントロールを行うと考えられる。上で見たように私たちの実際の生活では、一つの社会的場面であっても考慮すべき複数の関係性やそれに伴い複数の強化があることが一般的であり、それらの中で何を優先して行動すべきか、またそれを行うためにはその場面での他の関係性をどのように扱うことが必要であるのかを判断しなければならないことが多いであろう。それらとの関係を反映しながらLOCとセルフコントロールが作用していくのであろう。

なお、LOCとセルフコントロールの関係は、

LOCがセルフコントロールに影響を与える。あるいはセルフコントロールの成功・失敗がLOCに影響を与えるかのいずれかではなく、相互的なものであるだろう。つまり異なる状況も含めて私たちは“行動” — “結果” — “期待” — “行動” — “結果” — “期待” …の中にあると考えれば相互に影響し合っていると考えることが妥当であるだろう。

LOCに関する若干の問題

最後に筆者がLOCについて研究する過程で考えてきた幾つかの問題を指摘して本稿を終えることにしたい。

一般期待の形成について

これまで述べてきたように、LOCはその人の強化の過去経験によって形作られる。Rotterは行動を予測するに当たり、LOCだけでなく強化価値を考慮に入れる必要性を指摘している。しかし、LOCの形成における強化価値の果たす役割に関しては言及していないようである。社会的学習理論におけるモデルでは、それぞれの強化に関わる心理的状況の重みづけは考慮されず、一つ一つの強化経験は等しい重みづけを持ってLOCの形成に影響を与えると考えられている。自分にとって非常に重要な意味を持つ目標の実現に関わる強化体験と、その人にとって比較的重要度の低い目標実現に関わる強化体験とが期待形成に同じ重みを持つとは予測しにくい。

私たちは様々な強化経験を重ねていく中で、自分が得意であることと不得意であることを識別して行く。また社会的関係の中で自分にとって重要

であることとそうでないことを識別していく。おそらくこれらが重要な強化価値となったり、強化価値に結びつくことになるのであろう。自分の行動が高い価値を持つ強化をもたらした（あるいはもたらさなかった）とその人が判断すれば、それはLOCの大きな変動となってあらわれ、自分の行動があまり高くない価値を持つ強化をもたらした（あるいはもたらさなかった）とその人が判断すれば、LOCの変動は生じないか生じてもわずかな変動であることが予測される。したがってLOCへの下位の一般期待ないしは特定期待の貢献度は同じではないであろう。LOCの形成それ自体に強化価値が関わっていると考えることが必要であり、今後の検証が期待される。

LOCは一次元連続体なのか

LOCは、自分の行動と強化との間の随伴性に関する期待である。これは強化が自分の行動によってもたらされる程度に関する期待である。行動—強化の随伴関係が低いという期待は“運”“力のある他者”への期待が強いことと同等なのであろうか。

これについて行動予測力の観点からLevensonが検討を行っている。LOCから予測される政治的活動や社会改革を目指す組織的活動（以下、社会活動）への参加と不参加や、精神疾患の患者と非患者との違いなどがその通りに行かない報告がしばしばあること、特に外的統制の人でも内的統制の人と同じように社会活動に参加する人と参加しない人がいることなどを説明するためには、LOCを単次元であると考えよりは多次元であり、特に外的統制を運（C尺度）と力のある他者（P尺度）とに区分して内的統制（I尺度）とあわせて3次元構造を考え尺度化し（Levenson, 1972, 1974）、これらの検証を行い3次元性を確認している（Levenson, 1973, 1975, 1976）²。

LOCを自分の行動と強化（成果）との間の随伴関係として真に限定するなら、内的統制の高低として捉えなければならない。Levensonの一連の研究は内的統制を区別している点でそれを支持する結果を示していると言えよう。

² 他の研究者もLOC尺度の因子分析を行い下位尺度を同定しようとしてきた。例えばMirels (1970) はLOCの得点と他の諸変数との間の相関がかなり低い場合が多い点を指摘し、下位尺度を明確にすることでさまざまな行動の予測力を高めることができると述べ、大学生を対象に因子分析を行った。その結果、2つの因子を抽出し、それぞれがコントロールの対象が自分である項目群と、社会システムに関わる項目群で構成されるという結果を得ている。これはそれぞれの因子が内的統制項目と外的統制項目を含んでおり、内的統制と外的統制とが別次元であるとするものではない。

私たちが何らかの成果を求めて行動しその結果それが失敗したとき、それがLOCにどのように反映するのであろうか。Rotterのモデルから考えられることは、その失敗経験は程度はともかく外的統制の期待に寄与する経験となることである。しかし原因帰属の観点(Heider, 1958)を導入し、努力不足や練習不足のような内的で不安定な要因にその原因を求めるとすれば、その失敗経験が外的統制の期待に反映することはないと推測される。したがって強化が得られない経験が常に外的統制の期待の形成に寄与するとは言えないことになる。これらのことから内的統制の反対は単に内的統制への期待が低い、つまり低コントロール感と考えることが妥当であろう。

結語

LOCとセルフコントロールは、共にわれわれの心理的・社会的適応に関わる概念であるがそれぞれ別の文脈で検討されてきた。LOCは自身の行動と強化との間の随伴関係についての期待であり比較的安定した人格特性であるとされるが、過去経験に基づく自己評価の一側面であるとも言えよう。セルフコントロールは自己制御の過程であり、同時に目標実現のための手段であり能力である。

両概念の関係を明確にすることが、私たち人間の行動や適応への理解を深め、それらを促進するのであるとすればLOC概念の精緻化が必要である。つまりLOCの形成に関与する認知的要因やその過程を扱うモデルが求められる。先にも述べたようにRotter(1954)の社会的学習理論は、当時優勢であった学習理論に期待という認知を組合せ人間行動を理解し予測することを提唱した。これは心理学研究が人間の内的過程を軽視ないし無視する流れの中であって画期的なモデルの一つであったとも言えよう。しかしながら、今日的な他の概念との関係を検討したり比較を行うためにはいっそうの洗練化が必要である。

引用文献

Bandura, A. (1988). Perceived self-efficacy: Exercise

- of control through self-belief. In J. P. Dauwalder, M. Perrez, & V. Hobi (Eds.), *Annual series of European research in behavior therapy*, **2**, 27-59.
- Baumeister, R. F., Heatherton, T. F., & Tice, D. M. (1994). *Losing control: How and why people fail at self-regulation*. San Diego: Academic Press, Inc.
- Burger, J. M. (1989). Negative reaction to increases in perceived personal control. *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 246-256.
- Carton, J. S., & Nowicki, S. Jr. (1994). Antecedents of individual differences in locus of control of reinforcement: a critical review. *Genetic, Social and General Psychology Monographs*, **120**, 31-81.
- Carver, C. S., & Scheier, M. F. (1982). Control theory: A useful conceptual framework for personality-social, clinical, and health psychology. *Psychological Bulletin*, **92**, 111-125.
- Carver, C. S., & Scheier, M. F. (1998). *On the self-regulation of behavior*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Crandall, V. C., & Crandall, B. W. (1983). Maternal and childhood behaviors as antecedents of internal-external control perceptions in young adulthood. In H. M. Lefcourt (Ed.), *Research with the locus of control construct: Vol. 2. Developments and social problems*. San Diego, CA: Academic Press. pp.53-103.
- Declerck, C. H., Boone, C., & Brabander, B. De. (2006). On feeling in control: A biological theory for individual differences in control perception. *Brain and Cognition*, **62**, 143-176.
- Ferrer, M. & Krantz, M. (1987). Self-control, locus of control and social status in children. *Psychological Reports*, **60**, 355-358.
- Feldman, S. C., Martinez-Pons, M., & Shaham, D. (1995). The relationship of self-efficacy, self-regulation, and collaborative verbal behavior with grades: Preliminary findings. *Psychological*

- Reports*, **77**, 971-978.
- Forgus, B. S., Wolichik, S. A., Braver, S. L., Freedom, D. S., & Bay, R. C. (1992). Locus of control as a mediator of negative divorce-related events and adjustment problems in children. *American Journal of Orthopsychiatry*, **62**, 589-598
- Gaillot, M. T., Schmeichel, B. J., & Baumeister, R. F. (2006). Self-regulation process defend against the threat of death: effects of self-control depletion and trait self-control on thoughts and fears of dying. *Journal of Personality and Social Psychology*, **91**, 49-62.
- 樋口一辰・清水直治・鎌原雅彦 (1981). Locus of controlに関する文献的研究 東京工業大学人文論叢, **5**, 95-132 .
(Higuchi, K., Shimizu, N., & Kambara, M.)
- Heider, F. (1958). The psychology of interpersonal relations. John Wiley & Sons Inc. (大橋正夫 (訳) (1978). 対人関係の心理学 誠信書房)
- 神田信彦 (1993). 子ども用主観的統制感尺度の作成と妥当性の検討 教育心理学研究, **41**, 275-283.
(Kanda, N. (1993). A study on reliability and validity of a scale measuring the general perceived control for children. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **41**, 275-283.)
- Langer, E. J. (1975). The illusion of control. *Journal of Personality and Social Psychology*, **32**, 311-328.
- Levenson, H. (1972). Distinctions within the concept of internal-external control: Development of a new scale. *Proceedings of the 80th annual Convention of the American psychological Association*, 259-260. (Summary) (Levenson (1973) からの引用)
- Levenson, H. (1973). Multidimensional locus of control on psychiatric patients. *Journal of consulting and Clinical Psychology*, **41**, 397-404.
- Levenson, H. (1974). Activism and powerful others: Distinctions within the concept to internal-external control. *Journal of Personality Assessment*, **38**, 377-383.
- Levenson, H. (1975). Additional dimension of internal-external control. *The Journal of Social psychology*, **97**, 303-304.
- Levenson, H. (1976). Multidimensional locus of control in sociopolitical activists of conservative and liberal ideologies. *Journal of Personality and Social psychology*, **33**, 199-208.
- Levenson, H. (1981). Differentiating among internal-ity, powerful others, and chance. In H. Lefcourt (Ed.), *Research with the locus of control construct (vol. 1): Assessment methods*. New York: Academic Press, pp.15-63.
- Lipp, L., Kolstoe, R., James, W., & Randall, H. (1968). Denial of disability and internal control of reinforcement: A study using a perceptual defence. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **32**, 72-75.
- Lynch, S., Hurford, D. P., & Cole, A. K. (2002). Parental enabling attitudes and locus of control of at-risk and honors students. *Adolescence*, **37**, 527-549.
- Mirels, H. L. (1970). Dimension of internal versus external control. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **34**, 226-228.
- Mischel, W., Shoda, Y., & Peake, P. K. (1988). The nature of adolescent competencies predicted by preschool delay of gratification. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 687-696.
- 水口禮治 (1985). 人格構造の認知心理学的研究——Locus of Control (統制の所在性) に関する疎密性仮説の提唱と検証—— 風間書房 (Mizuguchi, R.)
- Muraven, M., & Baumeister, R. F. (2000). Self-regulation and depletion of limited resources: Does self-control resemble a muscle? *Psychological Bulletin*, **126**, 247-259.
- Phares, E. J. (1957). Expectancy change in skill and chance situations. *Journal of Abnormal and Social*

- Psychology*, **54**, 339-342. (Phares (1966) からの引用)
- Phares, E. J. (1966). Internal versus external control of reinforcement: a review. *Psychological Bulletin*, **65**, 206-220.
- Phares, E. J. (1976). *Locus of control in personality*. Morristown, New Jersey: General Learning Press.
- Phares, E. J., Ritchie, D. E., & Davis, W. L. (1968). Internal-external control and reaction to threat. *Journal of Personality and Social Psychology*, **10**, 402-405.
- Powers, W. T. (1973a). *Behavior: The control of perception*. Chicago: Aldine. (Carver, & Scheier (1982) からの引用)
- Powers, W. T. (1973b). Feedback: Beyond behaviorism. *Science*, **179**, 351-356. (Carver, & Scheier (1982) からの引用)
- Rotter, J. B. (1954). *Social learning theory and clinical psychology*. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall.
- Rotter, J. B. (1966). Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, **80**, 1-28.
- Rotter, J. B. (1975). Some problems and misconceptions related to the construct of internal versus external control of reinforcement. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **43**, 56-67.
- Seligman, M. E. P. (1975). *Helplessness in human*. W.H. Freeman & Co Ltd.
- Shell, D. F., & Husman, J. (2008). Control, motivation, affect, and strategic self-regulation in the college classroom: A multidimensional phenomenon. *Journal of Educational Psychology*, **100**, 443-459.
- Sinha, S. P., Nayyer, P. & Sinha, S. P. (2002). Social support self-control as variables in attitude toward life and perceived control among older people in india. *Journal of Social Psychology*, **142**, 527-540.
- Skinner, E. A. (1996). A guide to construct of control. *Journal of Personality and Social Psychology*, **71**, 549-570.
- Shoda, Y., Mischel, W., & Peake, P. K. (1990). Predicting adolescent cognitive and self regulatory competencies from preschool delay of gratification: Identifying diagnostic conditions. *Developmental Psychology*, **26**, 978-986.
- Tangney, J. P., Baumeister, R. F., & Boone, A. L. (2004). High self-control predicts good adjustment, less pathology, better grades, and interpersonal success. *Journal of Personality*, **72**, 272-326.
- Thompson, S. C. (1981). Will it hurt less if I can control it? A complex answer to a simple question. *Psychological Bulletin*, **90**, 89-101.
- Wolfe, R. N., & Johnson, S. D. (1995) Personality as a predictor of college performance. *Educational & Psychological Measurement*, **55**, 177-185.

——2008. 10. 15 受稿, 2008. 12. 16 受理——